

祖母の通知表

愛知県・岡崎市立甲山中学校 2年 鈴木 崇造

お金が人生の全て、ではないが、お金が無いためにあきらめざるをえない夢や希望もある。そう考えさせられた夏だった。

ぼくは今までお金について深く考えたことなどなかった。なぜなら、
「お母さん、陸上部のバス代 1,000 円。」

手を出しさえすれば、お金はちょん、と乗せられるし、友人の中には文房具やスポーツ用品の新製品が出るたびに買ってもらっている子もいるからだ。ぼくは彼らをずっとうらやましいと思ってきた。ところがこの夏、あるものに出会って、考えが変わった。

それは、祖母の通知表だ。お盆の準備に、仏壇の掃除をする祖母を手伝っていたぼくが、引出しの奥の方で偶然見つけた。その線香臭い古い紙切れはぼろぼろで、中には折り目で破れているものもあった。ぼくは国民学校1年生から中学を卒業するまでの9枚の通知表の、まずその紙質の悪さに驚いたが、中を見てさらに驚いた。そのほとんどが、全部優か、評価の一番良い成績で記されていたからだ。通知表と一緒に、陸上競技大会の優勝や、学業優秀の賞状も出てきた。

「おばあちゃん、すげえやん。」

と言うと、

「高校、行きたかったんだ。」

祖母は、ポツリと言った。しばらくぼくと一緒に、なつかしそうに通知表を見ていたが、

「崇君、これを崇君にあげるね、世界には、まだお金が無いという理由で学校に行けなかったり、命の危険にさらされている子供が、たくさんいることを忘れないでほしい。」

そう言って、祖母は長い間守り続けてきた大切な記録を、ぼくに持たせた。

そう、成績優秀で、勉強が大好き、将来は教師になりたいという夢をもって来た祖母は貧しい戦後の動乱の中で、進学することができなかったのだ。お金が無い、という理由で。

通知表を手にとると、当時の祖母の思いが伝わってくるようだった。疎開するため転校しながらも欠席は9年間でわずか5回。どの所見にも優秀という文字があり、生徒会の役員をしていた記述もあった。記録によれば、卒業時の身長は

142.4センチ、体重は38キロ。こんなに小さな体で、社会に出て働かなければならなかった祖母が、楽しそうにおしゃべりをしながら歩いて行く女子校生達をどんな思いで見っていたのだろう、そう思うと切なくなった。ぼろぼろになった通知表は、これを祖母が何度も何度も見直していたことを物語る。どうしてこんなに優秀な自分が進学できないのか、もう夢はかなわない、という絶望の日も、大丈夫こんなに優秀なのだから、きっといつかは夢がかなうと自分に言い聞かせた日も、くり返し広げられた通知表は、15才の少女の涙を知っている。ぼくはお金が無いから夢をあきらめなければならない、という悔しさを初めて真剣に考えた。そんな時目にした雑誌の中から、学校へ行けないベトナムの少女の瞳がぼくの胸にささった。同時に、ぼくの通う中学校の生徒会が行っている、施設への寄付のためのアルミ缶回収の、あの軽いアルミ缶の重さを知った。

高校進学は断念した祖母だが、その後猛勉強し、歯科技工士となった。最近まで技工所を経営していて、今は幸福に暮らしている。もちろん、お金にも余裕ができた。しかし後でいくらお金を出しても、祖母の青春は買いもどせない。10代の高校生活を買うことはできない。この事実からも、「まさにその時」のお金こそ貴重であり、だからこそ、お金は尊く、大切なものだと思う。そしてこの実体験を持つからこそ、祖母の今がある。

祖母の「働く、貯める、使う、そして働く」という姿勢と、「今まさにここで使う時」の決断は、見事なものだ。兄がアメリカへホームステイに行きたいと言った時、

「今こそチャンス、行っといで。」

と全額を払った。また孫達4人のピアノの月謝も、毎月祖母が払い続けている。「身についたものは、一生の宝。それに孫がピアノを弾けるとい夢を買っている。」と祖母は笑う。

ピアノを習い始めてから9年目、ぼくが祖母からもらった財産が二つになった。ピアノが弾ける、という自信と、祖母から託された通知表だ。世の中は、インターネットにテレビに雑誌、消費にかりたてられる華やかな一瞬であふれかえっている。ぼくも、のみこまれそうになるだろう。だからこそぼくは、これから何かを買う時、今一度、祖母の通知表に相談したい。そのお金の使い方が、恥ずかしくないかどうかを。

でも将来、働いて最初に手にするお金の使い方だけは決めている。そのうちの半分で祖母に精一杯のプレゼントをしたい。そしてあと半分は、お金が無くて学校へ行けない、ぼくの知らないだれかのために使いたい。